

大磯町郷土資料館

Oiso Municipal Museum

江戸時代には東海道の宿場町として栄え、明治18年の松本順による海水浴場開設、そしてその2年後の東海道線大磯駅開業を契機として、明治期には避暑地や保養地として全国にその名を馳せた町、大磯。温暖な気候と美しい景観に恵まれたこの地には、明治から昭和にかけて政財界の要人たちが競って別荘を建築しました。

今回大磯町郷土資料館の展示資料の中から、この度開催される邸園文化交流園・大磯で巡る別荘群に関連する人物・資料をご紹介します。この他にも館内には大磯が育んできた歴史や文化、そして豊かな自然に関する貴重な資料の数々が展示されておりますので、ぜひ合わせてご覧ください。

旧吉田茂邸

吉田邸は養父の吉田健三が明治17年に現在地に別荘を建てたのが始まり。当初は簡素な邸宅であったが、戦後この別荘を自邸として使用するようになり、外国から貴賓を招くために日本芸術院会員であった建築家吉田五十八に設計を依頼し、豪壮な邸宅となった。首相辞任後は大磯に隠棲するも、多くの政治家や外国からの来賓が訪れるなど、亡くなるまで政界の実力者として絶大な影響力を誇った。

吉田茂(1878-1967)

土佐自由党の竹内綱の五男として生まれ、3歳で横浜の貿易商吉田健三の養子となる。東京帝国大学卒業後外務省に入り、奉天総領事・駐伊・駐英大使等を歴任。太平洋戦争末期には近衛文麿元首相らと和平工作を企て(近衛上奏文) 憲兵隊に拘置された。終戦後は東久邇宮・幣原内閣の外相となる。昭和21年には公職追放となった鳩山一郎の後任として自由党総裁に就任し、日本進歩党との連立のもと、第一次吉田内閣を組閣。日本国憲法の制定など、戦後の日本民主化の礎を築いた。昭和26年、第三次吉田内閣のとき、サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約を締結。池田勇人や佐藤栄作を代表とする官僚出身の国会議員(吉田学校)を重用し、後の保守本流の形成へと繋がった。昭和38年10月、衆議院解散に伴い政界を引退。昭和42年10月20日大磯の自邸で死去。享年89歳。国葬。墓所は青山霊園。

岳父は牧野伸顕(大久保利通次男)。第92代内閣総理大臣麻生太郎は孫に当たる。



大磯町郷土資料館展示資料
吉田茂制作こけし
(大磯町立図書館蔵)

吉田五十八(1894-1974)

昭和期に活躍した建築家。欧米留学後、伝統的な数奇屋建築を近代化した独自の作風を確立したことで知られる。主な作品に東京歌舞伎座の改修、日本芸術院会館、五島美術館など。

大磯町郷土資料館・県立大磯城山公園 旧三井邸跡

明治中頃、三井家の別荘地として軍医總監橋本綱常の所有地を購入、明治31年に別荘城山荘を建築した。当初は茅葺の平屋であったというが、この建物は、大正12年の関東大震災により甚大な被害を受け、昭和3年に修繕を終えている。城山荘の新築に取り掛かった三井高棟は、震災の経験から当時木造耐震建築の第一人者であった久米権九郎に設計を依頼し、全国有名社寺の古材が使用された城山荘本館は昭和9年暮に竣工した。設計の際に作成した木造模型は現在大磯町郷土資料館のエントランスホールに展示されている。敷地と建物は昭和45年名古屋鉄道株式会社の所有となり、建物は解体されたが、敷地は現在県立大磯城山公園として親しまれ、多くの来園者で賑わいを見せている。

三井高棟(1857-1948)

三井総領家(北家)第10代当主。明治18年に家督を相続し、八郎右衛門を襲名。明治42年(1909)三井合名会社の設立に伴い社長に就任し、変革期の三井家を導いた。昭和8年に嫡男高公に家督を譲り引退。隠居後は生活の拠点を大磯に移し、昭和23年91歳で亡くなった。

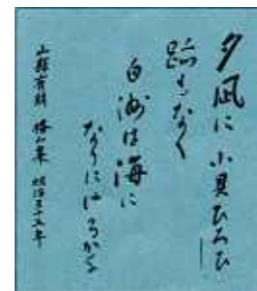


大磯町郷土資料館展示資料

久米権九郎設計「城山荘(三井大磯別邸)軸組模型」昭和8年
昭和9年に竣工された城山荘は久米権九郎の設計のもと、この構造模型を基礎に建てられたが、実際の建物とはデザインが一部異なる。城山荘は城山公園内の展望台の付近に建てられた。大磯町郷土資料館はこの城山荘をモチーフにして建てられている。

大磯中学校(旧山縣有朋邸)

明治18年大磯海水浴場を開設した松本順と親交のあった山縣有朋は明治20年に大磯に土地を購入、別荘「小洵庵」を建てた。これを皮切りに数多くの名士がこぞって大磯に別荘を構えることとなる。松本順の死後、この別荘は三井家に売却され、山縣は大磯を離れる。明治40年山縣は新たに小田原に「古稀庵」を構え、そこで晩年を過ごした。



大磯町郷土資料館 廻廊

「詩歌・文学にみる大磯の景観」

夕風に 小貝ひろひし 跡もなく

白洲は海に なりにけるかな

(山縣有朋『椿山集』明治35年)

山縣有朋(1838-1922)

長州藩下級士族の子として誕生。松下村塾に学び、尊皇攘夷運動に参加、奇兵隊軍監として活躍した。戊辰戦争に参謀として転戦。明治2年には渡欧し、各国の軍政を視察、帰国後は廃藩置県、徴兵制を実現させた。明治6年に陸軍卿となり日本陸軍の礎を築いた。第一次伊藤内閣のもとでは内相を務め、明治22年に第一次、明治31年には第2次山縣内閣を組織。日清戦争では第一軍司令官、日露戦争では参謀総長として活躍。伊藤博文の死後は元老の筆頭として権力を誇った。大正11年小田原の「古稀庵」にて死去。享年85歳。

滄浪閣（旧伊藤博文邸）

伊藤博文は明治23年に小田原に別荘滄浪閣を設けたが、小田原への往復の途次、大磯の旅館招仙閣へたびたび宿泊しており、交通の便（当時は東海道線が国府津から御殿場回りであった）や梅子夫人の療養に考慮して、明治29年大磯に滄浪閣を移した。明治30年には本籍を大磯に移し、滄浪閣は別荘から本宅へ、そして伊藤博文は大磯町民となった。大磯から滄浪閣へと至る道は、伊藤博文が韓国統監を勤めたことから「統監道」と呼ばれている。伊藤の死後、屋敷は大正10年朝鮮の李王朝に譲渡されるが、昭和21年には政治家榎橋渡へ、昭和26年には西武鉄道株式会社に売却された。現在では個人の所有となっている。

伊藤博文(1841-1909)

長州藩周防国（現在の山口県）に生まれる。吉田松陰の松下村塾に学ぶ。高杉晋作や木戸孝允らとともに攘夷運動に挺身し、品川御殿山英国公使館焼き討ちなどに参加。文久3年には井上馨・山尾庸三・井上勝・遠藤謹助と共に英国に留学するが、四ヶ国艦隊下関砲撃事件を聞き急遽元治元年に帰国し、連合国との講和に尽力した。同年長州藩の俗論党に対する高杉晋作の功山寺拳兵では力士隊を率いてこれに従う。維新後は兵庫県知事や工部卿など要職を歴任、明治4年には岩倉具視率いる岩倉使節団副使として参加し、欧米を視察。明治の三傑（西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允）死去及び明治14年の政変による大隈重信追放後は名実共に明治政府の実権を握った。明治15年には憲法調査のため渡欧、明治18年には内閣制度を創設し、初代内閣総理大臣に就任。その後は憲法起草に取り組み、大日本帝国憲法及び皇室典範の制定を指導した。その後初代枢密院議長、初代貴族院議長などを歴任し、明治33年に自らの与党として立憲政友会を結成、総裁となった。明治38年韓国統監府を設置し、初代韓国統監となる。統監辞任後の明治42年、ハルビン駅頭で狙撃された。



大磯町郷土資料館展示資料
伊藤博文 山高帽子 明治時代
本人が実際に使用した礼服用



大磯町郷土資料館展示資料
伊藤博文 左：統監帽・肩章 / 右：サーベル



旧島崎藤村邸

昭和16年1月、知人の天明愛吉や菊池重三郎に誘われ、左義長見物に大磯を訪れ、大磯の地をいたく気に入った藤村は小屋「町屋園」借り受け、移り住んだ。翌年には土地と家屋を購入している。庭には藤村が愛した白椿など、様々な樹木が植えられた。藤村は『東方の門』執筆中の昭和18年8月脳溢血のため倒れ、2年半を過ごした大磯の自邸で没する。最期の言葉は「涼しい風だね」。遺体は地福寺に埋葬されている。

島崎藤村(1872-1943)

筑摩県馬籠村（現在の岐阜県中津川市）の旧家に生まれる。明治学院卒業後、明治女学校で教鞭をとるかたわら、明治26年北村透谷らの『文学界』創刊に参加。明治30年には処女詩集『若菜集』を刊行し、浪漫詩人として活躍した。その後も詩集『一葉舟』、『夏草』、『落梅集』を刊行するが、次第に作風を散文へと移行、明治38年には『破戒』を出版、小説家として再出発した藤村は、続けて『春』、『家』を発表し、自然主義文学の代表作家としての地位を確立した。大正2年に渡仏、帰国後は『新生』、『嵐』などを発表。昭和4年から10年まで連載された長編小説『夜明け前』は藤村晩年の代表作であり、高く評価された。昭和18年に『東方の門』の連載を開始するが、同年大磯の自邸にて死去。

大磯町郷土資料館展示資料
平成20年度博物館実習生による展示
「島崎藤村が愛した町・大磯」



制作

大磯町郷土資料館

〒255-005 神奈川県中郡大磯町西小磯 446-1
電話 0463(61)4700 / FAX 0463(61)4660

利用案内

開館時間 午前9時から午後4時30分まで
入館は午後4時まで
休館日 月曜日・毎月1日・年末年始(12/29~1/4)
ただし、月曜日が祝日の場合は開館とし、翌日休館
入館料 無料

交通案内

JR東海道線「大磯駅」下車 徒歩：約30分（約2km）
バス：「二宮駅行」・「国府津駅行」・「湘南大磯住宅行」 城山公園前下車徒歩5分

大磯町郷土資料館ブログ [大磯町郷土資料館ノート](#) 更新中！！

アドレス <http://scn-net.easymyweb.jp/member/oisomuseum/>

携帯アクセスはこちらから



大磯町郷土資料館への行き方

